

■ 吉岡 桂子（朝日新聞中国総局（北京）特派員）

ニイハオ！ 2度目の北京特派員生活が始まりました。このメッセージを書いている今夜、到着したばかりです。

私は1987年3月に岡山大学法学部を卒業しました。山陽放送を経て朝日新聞社で記者となって20年が過ぎたところです。岡山生まれの岡山育ち。しかも県内で転校の経験すらありませんでした。それが転職後、和歌山、大阪、東京、上海、北京、ワシントンと転々としています。私にとって、岡山以外はすべて外国と言えるほど、足を踏み入れた当初はいつも未知の世界です。知り合いもいないし、言葉も習慣も違います。そこは、ふるさと岡山以外の日本も外国も似たようなものです。生活に慣れ、分かり合える人を得るまで時間がかかる一方で、分かり合える人はどこにでもいます。

尖閣諸島沖の中国漁船衝突事件で、日本と中国の関係が大きく揺さぶられています。領土や主権の問題は、日中に限らず、譲れないことがたくさんあります。政治制度も抱える歴史も社会の規範も違います。異なる立場どうし妥協を重ね、うまくやりくりしながら共存するしか手だてはありません。相手の妥協を引き出すには自らは何をすべきか。日々の生活も外交も似通ったところがあります。

「最近の若者は内向きだ。留学や海外勤務を望まない」。「おじさん」たちの嘆き取材を通じてしばしば耳にします。本当かな？

自分と異なる立場の誰かと知り合い、分かり合おうと格闘するうちに相手も自分もいつのまにか何かが少しだけ変わっている。私はそんな楽しさを、あちこちを転々とするうちに知りました。岡山大学の中にも中国を初めとして留学生も増えていることでしょう。似たところを探して触れ合うのはもちろんだけど、違うことを知り、悩み、そして楽しんでくださいね。

13億の中国の人々と格闘しながら書く記事、読んでいただけると嬉しいです。

中秋節の翌日、青島ビールを飲みながら。